

視



論説委員兼編集委員・田原牧



がったが、限定的だった。政権側に立った拙いデマも相次いだ。例えば、米英の同様の団体には税金が入っていないという橋下徹・元大阪府知事の主張などがそうだ。だが、それが虚偽と分かっても大騒ぎにはならなかった。

大闘争の渦中では、戦後民主主義の旗手だった政治学者の丸山真男氏が「学生の安否よりも資料が大切」と振る舞い、学生らから指弾された。ただ、現在のそれは違つ。先の大学教授は「世間は大学の教員なんてもっともなことを言っているだけの『特権階層』とみている」と話す。

学術会議任命拒否問題

操られる「特権」敵視

深いと考えている。それは世間の関心の薄さだ。一部は冷笑的ですらある。たしかに拒否の発覚後、政権支持率は下

根底には「象牙の塔」への無言の反発があるのではないかと。それはいまに始まったことではない。約半世紀前の東

「格差が広がり、望む仕事に就ける人が極端に少なくなつた。その中で実態は知らずとも、学者は恵まれた連中と

酒場でよく顔を合わせる大学教授がこう漏らした。「いまは見知らぬ人に『大学の教員です』とは名乗りにくい」話題は日本学術会議の任命拒否問題だった。結論は明白である。「会員の適否を政治権力が決められるようになれば、会議の独立性は破壊される」(拒まれた一人である早稲田大の岡田正則教授)ということに尽きるだろう。

菅義偉首相に任命拒否された人びとの顔触れにも驚かされた。「さもありなん」という人はいない。皇室と懇意だったり、政治的に穏やかな人ばかりである。それが一切の批判を許さないという、この政権の異様さを際立たせる。政治警察的な統制は危うい。だが、問題の根はもっと

思われがちだ。それへの怨嗟^{えんさ}をひしひしと感じる」

将来への不安や時代の被害者といった感情は既存の権威への破壊願望へ転化する。しかも募った不満は回りくどい理詰め^{りきめ}の検証よりも、強引な打開策を求めがちだ。「ぶっ壊せ」の小泉純一郎元首相の人氣が好例である。同じころからネットの普及による人びとの意思表示の解放もあり、いわゆる「反知性主義」と呼ばれる現象も顕在化した。

「立憲デモクラシーの会」など、良識ある学者たちは権力の横暴の防波堤になっっている。だが、社会にはそれを越

える勢いの「特権敵視」の情動が渦巻く。それが任命拒否にあらがう学者たちへの共感を妨げてはいないか。

こうした現象は日本に限らない。米国でも東西両海岸に象徴的な「知識層」に対する白人労働者らの反感がトランプ政権の土台になった。

任命拒否の行方とは別に、学者らにはこうした「敵視」を覆す難題が課せられている。一方、もし今回の任命拒否がこうした世間の情動を読んだの企てだとすれば、この政権は侮れない。「パンケーキおじさん」などと、軽口をたたいている場合ではない。